

図説 日本
の古典

18

京伝・二九・春水



図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授	神田秀夫	奈良国立文化 財研究所長	坪井清足	学習院大 学教授	黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授	伊藤 博	成城大 学教授	上原 和	学習院大 学教授	黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大 学教授	小島環禮	文化 庁	上原昭一	東京大 学助教授	笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大 学助教授	久保田 淳	美術 史家	白畑よし	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子 大学教授	片桐洋一	大谷女子 大学教授	伊藤敏子	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	明治大 学教授	木村正中	美術 史家	白畑よし	東京大 学教授	土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大 学教授	秋山 虔	学習院大 学教授	秋山光和	東京大 学教授	土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田大 学教授	国東文麿	美術 史家	梅津次郎	京都女子 大学教授	村井康彦
第9巻／平家物語	神戸大 学名誉教授	永積安明	大阪大 学教授	武田恒夫	京都大 学教授	上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女子 大学助教授	三木紀人	東京国立文 化財研究所	宮 次男	東京大 学助教授	益田 宗
第11巻／太平記	早稲田大 学教授	梶原正昭	東京国立文 化財研究所	宮 次男	京都大 学教授	上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大 学教授	小山弘志	京都国立 博物館	切畑 健	大阪市立 大学教授	原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究 資料館長	市古貞次	美術 史家	高崎富士彦	東北大学 名誉教授	豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授	白石悌三	文化 庁	佐々木丞平	前学習院 大学長	児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授	長谷川 強	東京大学 名誉教授	山根有三	前学習院 大学長	児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学習院大 学教授	諏訪春雄	大阪大学 助教授	信多純一	横浜市立 大学教授	辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究 資料館教授	松田 修	名古屋大 学助教授	河野元昭	学習院大 学教授	大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大 学教授	神保五弥	東京国立 博物館	小林 忠	立正大 学教授	北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授	水野 稔	国立国会 図書館	鈴木重三	東京学芸大 学助教授	竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大 学教授	郡司正勝	東京国立 博物館	小林 忠	成城大 学教授	西山松之助

図説 日本の古典18 京伝・一九・春水

昭和55年1月20日 第1刷印刷

昭和55年2月9日 第1刷発行

著者代表——神保五弥 ©1980

発行者——堀内末男

発行所——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)238-2781

出版部 東京(03)230-6351

振替—15653／郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙——王子製紙株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかいたします。

0391-167018-3041

Printed in Japan

〈企画委員〉

東京大学教授

秋山 虔

国文学研究資料館長

市古貞次

前学習院大学長

児玉幸多

早稲田大学教授

神保五弥

前東京大学教授

山根有三

〈第一八巻・編集委員〉

早稲田大学教授

神保五弥

東京国立博物館

小林 忠

立正大学教授

北原 進

京伝・一九・春水



集英社

目次

●カラー図版●山東京伝「吉原傾城 新美人合目筆鏡」／京伝肖像「江戸花京橋名取京伝像」／十返舎一九自画賛「醉舞図」／一九肖像「戯作者六家撰」／
為永春水筆「花名所懐中曆」草稿／春水肖像「浦島仙人教訓奇談 玉手箱」／富士遠望／「東海道五拾三次之内・御油」／「其のままだ口 猫飼好五十三足」／
「新吉原桜之景色」／「江戸両国すすみの図」／「東西南北之美人・東方の美人 仲町」／「角田川月見船」／「隅田川遊楽図巻」／「醉余美人図」／
「流光藍仕立」／京伝の板本／一九の板本／春水の板本

江戸の戯作―江戸後期小説の発生と展開 神保五弥
都会文学としての戯作 洒落本 滑稽本 人情本 草双紙

●図版特集●

名所絵と道中絵 小林 忠

「江都八景・両国橋夕照」／「東都御茶之水風景」／「江戸近郊八景之内・玉川秋月」／「富嶽三十六景・東海道程ヶ谷」／「東海道五拾三次之内・蒲原」／「同・庄野」／
「木曾街道 追分宿浅間山眺望」／「木曾街道六拾九次之内・洗馬」／「木曾路之山川」／「近江八景」／「京都名所之内・あらし山満花」／「同・四条河原夕涼」

十返舎一九作

『東海道中膝栗毛』―作品鑑賞 小池正胤

『膝栗毛』の刊行とその後 江戸時代の旅と文学と 弥治・喜多 弥治・喜多のあとを追って

●図版特集●

絵師山東京伝 小林 忠

「吉原傾城 新美人合目筆鏡」／「当世艶風拾形図・かつさや」／「当世美人色競・山下花」／「古今青楼 咄の絵有多」／「御存商売物」／「傾城買四十八手」／
「青楼昼之世界 錦之裏」／「江戸風俗図巻」

山東京伝 作

『江戸生艶気樺焼』―作品鑑賞 中野三敏

京伝鼻登場 金に飽かした女道楽 本望成就

『通言総籬』―作品鑑賞 中野三敏

序開き 発端 遊びの段

●図版特集●

通といき 中野三敏

三井親和書「通」／十八大通／文京公と猿人卿／「市川海老蔵の助六」／「当世風俗通」／流行の茶染見本「諸色染手鑑」／
「小紋帖」／丹次郎を取り巻く女たち／「絵本時世粧」

『春色梅児誉美』——作品鑑賞 神保五弥……………108

戯作者としての自立 情痴的恋愛小説 女のために女を描く

江戸の遊里 中野三敏……………121

江戸後期の遊里 吉原 岡場所

江戸のディレクタント——山東京伝の生涯 中山右尚……………140

京伝生い立ちの記 天明の寵児 寛政の筆禍 闇の中の光条

自己を演出する名タレント——十返舎一九の生涯 小池正胤……………150

駿河——大坂——江戸・放浪から定着へ 戯作者としての出発 写楽と一九一九交友圏の確立
浮世第一の戯作者

女のために女を描く——為永春水の生涯 神保五弥……………158

古版表題替悪彫工の版元 へっぽこ作者の惣大将 人情本の代表作家

●図版特集●

江戸後期の美人画 菊地貞夫……………165

鈴木春信／北尾重政／鳥居清長／窪俊満／喜多川歌麿／鳥文斎栄之／鳥高斎栄昌／東洲斎写楽／栄松斎長喜／菊川英山／
歌川豊国／歌川国貞／歌川国安／葛飾北斎／溪斎英泉

挿絵と江戸市民の生活文化——小説史の中での挿絵 棚橋正博……………180

江戸後期小説の発生と展開 挿絵の新たな展開

札差と魚河岸町人 北原 進……………189

日本橋魚河岸の発展 御蔵前の札差

改革の嵐に耐える町人 北原 進……………204

札差と勘定所御用達 文芸の統制

江戸戯作年表 棚橋正博……………216

凡例

1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、各図版の解説には、その本文部分の執筆者があつたが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによつた。原文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

4 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は一部をのぞいて略させていた。

5 本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第一八巻・執筆者〉

九州大学助教授	中野三敏
東京国立博物館	小林 忠
共立女子短期大学専任講師	中山右尚
東京学芸大学教授	小池正胤
早稲田大学教授	神保五弥
東京国立博物館	菊地貞夫
帝京大学講師	棚橋正博
立正大学教授	北原 進

〈装幀〉

後藤市三
レイアウト
宇喜多邦嘉
樋口英男



1 山東京伝〈北尾政演〉『新美人合自筆鏡』 2 京伝肖像『江戸花京橋名取京伝像』——京伝美人画の代表作というよりは、当代錦絵絵本の最豪華版といつてよいこの『吉原傾城 新美人合自筆鏡』（1図）は、天明4年（1784）に袋入り一冊の画帖として刊行されたものだが、この内の若干が一枚摺りの浮世絵としても残っており、恐らく天明2、3年頃に一枚摺りの組物として売り出され、4年に画帖に纏められたのであろう。広告文句に「初衣裳生うつし仕候」とあって、それぞれ正月の晴れ着をうつしたものであり、實も各遊女の自筆という。京伝の肖像『江戸花京橋名取京伝像』（2図）は細田（鳥文斎）米之の弟子米里の描く所。細面でちょっと線の細い顔立ち、いかにも江戸の水に洗いあげられた感性の鋭さを示している。手に持つのは京伝摺りの煙管か。紋所は愛用の巴山人印。1図／オーストリア工芸美術館 2図／東京国立博物館

3 十返舎一九自画賛『醉舞図』 4
 一九肖像<『戯作者六家撰』>——戯作者には器用な人が多いが、一九はその中でもまた特に器用である。掲出したような画賛物(3図)の残るものも非常に多く、そのいずれもが結構上手にできたものばかりである。「一生を人にのまればひとをのむくちは耳まで酒の一徳」。むろん自作の狂歌であるが、自身大の上戸でもあった。その酒癖は乱に至る如きは無く、相手を楽しませることにもつばらとなるていものだったろうとは、彼の作柄から見て誰しも考える所だろうが、さて『戯作者六家撰』に掲げられた歌川国貞筆一九像(4図)を見ると、何とも悲気なその面貌には一瞬ハッとさせられるものがある。これが正真正正の顔立ちであるとすれば、この人の笑いをふりまいた一生の裏には、うかがい知れぬ何かがあったとしか思いようがない。3図/神奈川県・東福寺 4図/東京大学文学部国文学研究室



4





5 為永春水筆『花名所懐中曆』草稿

6 春水肖像(『浦島仙人教訓奇談 玉手箱』)——後期の戯作、殊に草双紙、合巻の作者などは自身で草稿に絵組みまで考えて作るのが普通のことである。5図は、おさん茂兵衛を仕組んだ人情本『花名所懐中曆』(天保7(1836)~10年)に附した口絵の春水自身による絵組みで、これが板本では専門絵師溪斎英泉によって、本文23ページ33図に見られる通りのできあがりになる。草双紙類には画面に作者自身が登場するものも珍しくはない。下段6図はそうしたもののひとつ、天保15年刊の春水作合巻『浦島仙人教訓奇談 玉手箱』の巻末に見られる作者自身の画像である。ややうつむき加減のこの姿は陰気で執着の強そうな、まさしく春水らしい顔と評されているが、教訓亭の名にふさわしく、いかにも律気で考え深げに描かれているところがご愛敬か。5図/東京都立中央図書館 6図/早稲田大学図書館







7 富士遠望——四時雪をいただく富嶽の清楚な姿は、東海道を上り下りする往時の旅人たちに、どれほど深い安らぎと慰めを与えたことだろう。好天に恵まれ、幸いに富士の全容を眺め得た人はみな、和歌や俳句のひとつもひねり出すにわか詩人となり、あるいは、絵筆もたぬ心の画家となった自分に気づかされたにちがいない。今もなお、新幹線の車窓にみごとな麗姿を認めて、思わず嘆声をもらす人は多い。写真は、晩秋の一日、箱根の大観山道から芦ノ湖をへだてて遠望したもので、雲ひとつない澄みきった青空に白雪の山頂が美しく映えている。（昭和54年11月14日午前9時撮影）

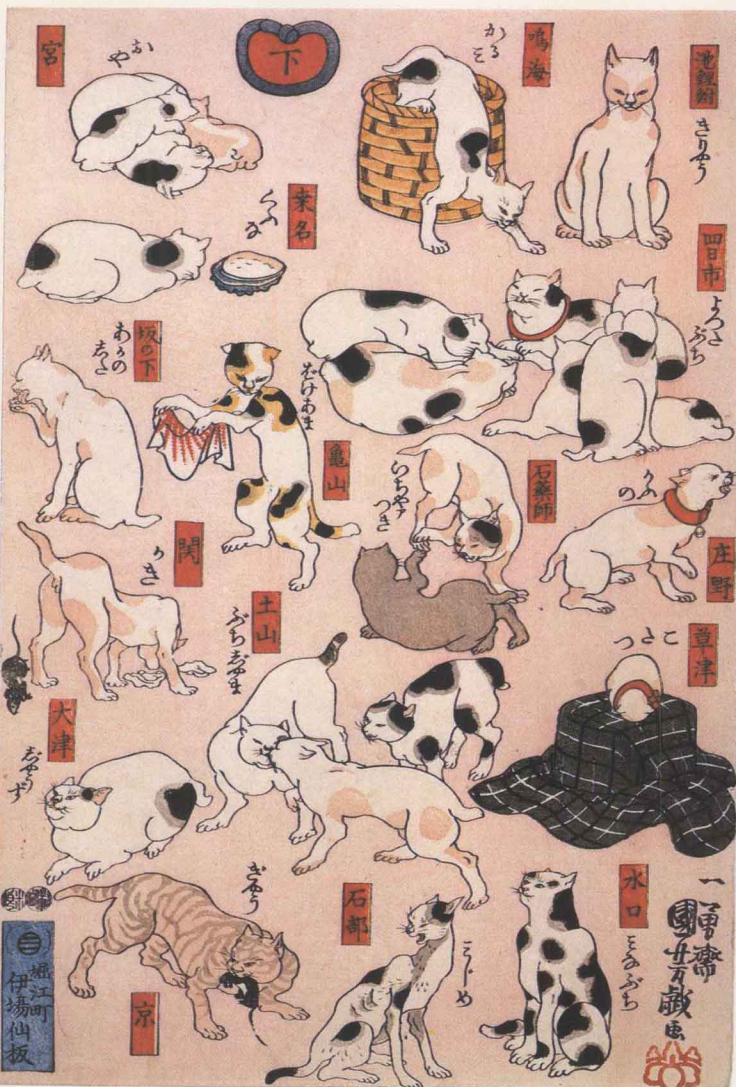


8 歌川広重『東海道五拾三次之内・御油』——副題に「旅人留女」とあるように、一九の『道中膝栗毛』が、「両がはより出くるとめ女、いづれもめんをかぶりたるごとく、ぬりたてたるが、そでをひいてうるさければ」(4編)と記す情景をほとんどそのままに絵解(えとき)している。小説が出てから28年後の天保4年(1833)の作画で、広重の出世作となった保永堂版五十三次の一図である。右手の旅籠屋(はたごや)内部には、

「東海道続画 彫工治郎兵衛 摺師平兵衛 一立斎 竹之内板」の文字が見える。この記念的な名作シリーズは、これらの版元・絵師・彫師・摺師4者が力を合わせて、はじめて実現したのであった。横大判錦絵。五十五枚揃のうち。／東京国立博物館



9 歌川国芳『猫好きで知られた国芳(1797～1861)が、東海道五十三次各駅の地名を猫にちなんで地口に洒落、飼猫たちの様々な生態をそれに合わせて描き飼ったものである。いうまでもなく広重の東海道五十三次絵をもじった戯画で、国芳ならではの旺盛なパロディ精神が天真爛漫に発揮されていて、小気味よい。広重画に遅れることさらに15年の、嘉永元年(1848)ごろの作である。大判錦絵。三枚続。





Österr. Museum für Angewandte Kunst

Österr. Museum für Angewandte Kunst



11 歌川豊国『江戸両国すずみの図』
 —10図の『新吉原桜之景色』と姉妹作にあたるもので、版元は同じく芳町(よしちょう)河岸角の山本久兵衛である。江戸の春を新吉原の夜桜に代表させた前図に対し、ここでは武蔵国と下総国(しもさのくに)をつなぐ両国橋に五枚続の画面をつらぬかせ、夏の日の納涼に繰り出したおびたしい人出を一望の視野のうちにおさめている。前景には、土地柄を表わす相撲取りのほか、この時期ならではの水売りも含めてあらゆる階層の男女が、豊国(1769~1825)らしく役者絵風のポーズをとらされて立ち並ぶ。画面左端、橋のたもとより張りでは、団扇(うちわ)や虫籠を商っており、季節感の表現にぬかりはない。大判錦絵。五枚続。／オーストリア工芸美術館

10 歌川豊国『新吉原桜之景色』——浮世絵版画も、二枚続、三枚続はよくあるが、このような五枚続は珍しい。右はしに大門口（おおもんぐち）を見せ、左の4枚に新吉原遊廓のメインストリート仲の町の、満開の桜並木と人のぎわいを展開させている。江戸市街の中心から遠く隔離された新吉原は、ここに描かれるような春の夜桜や、秋の燈籠、俄（にわか＝狂言）などと、魅力的な町の装いや年中行事に趣向をこらして、遊客たちの足を引きつける必要があった。大判錦絵。五枚続。／オーストリア工芸美術館



11



13 鳥居清長『角田川月見船』—江戸の町人文化は、隅田川の水によって育てられたといっ
てよい。春は桜、夏は納涼、秋は
月、冬は雪と、四季折々の風物を
楽しませたばかりか、吉原や深川
の遊里への風流な通い路ともなっ
た。小説も、浮世絵も、この清流
の描写を抜きにしては、味もそっ
けもなくってしまう。本図は、
名月に誘われて屋根舟を出した今
葉平(いまなりひら)が、馴染みの
女たちと清夜の一刻を楽しんでい
るところ。天明初年の清長の、き
っぱりとした知的な画面構成がこ
ころよい。中判錦絵。



12 北尾重政『東西南北之美人・東方の美人 仲町』—
安永・天明期の江戸を代表する遊里といえば、北の吉原、南
の品川、東の深川、西の内藤新宿ということになる。これら4
つの遊廓・岡場所、それぞれの土地の気風を反映して独特の
性格を形成し、悪所狂いの遊客たちに幅広い選択を許したも
のである。ここには、東方の美人として深川仲町の羽織芸者から
「於仲(おなか)」と「おしま」の二人の芸者を選び、素人風を売り
物とした当地の女の粋(いき)な風情を写し伝えている。無款な
がら画風より北尾重政の作と知れ、画面の左端に「安永五申年
春の末夏の初メしゆすびろうどの錦画……此比此地の風……」
と墨書の書入れがあるが、絵そのものは天明期に入ったの作と
考えられる。大判錦絵。／東京国立博物館

